Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

習慣の原理についての一考察 ： 「心体操」の理論的基礎付けに向けて ： 博士論文要旨

富田, 大介

(Citation)
美学芸術学論集,8:111-111

(Issue Date)
2012-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81003952

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003952

博士論文要旨

習慣の原理についての一考察
—「心体操」の理論的基礎付けに向けて —

富田大介

本稿は、筆者が独自に実践する「心体操（心と体の操）」を理論的に基礎付けようという動機から——心身二元の根底と目される——「習慣の原理」を追究したものである。

第 I 章では、P・ヴァレリーの舞踊思想から「体の操」の方法が探られた。踊り子の異常な（extraordinaire）肉体を想いながら、詩人は人の踊る第一義的理由を「エネルギーの消散」と看破し、その消散運動を秩序付ける形式を「ダンス」と称えた。「ダンス」は故に運動習慣の法則として働く「超越論的技術」とも言える。時に肉体の潜在力を抉摘し、運動主を恍惚（脱自性）へと導くそれは、肉体（生・人）と霊魂（死・神）のあわいを浮遊する「水母」に喩えられる。

続く間奏では、水母に代理表象された習慣の原理が、F・ラヴェッソンの論考によって補われ、（次章の）H・ベルクソンの思想へと繋がれた。ラヴェッソンの論じる「習慣」は、既得の習慣を変容する「態勢」、すなわち生命による習慣化の原理である。それは私たちの意識下で、人為と自然を往来する「動的な中項」と考えられる。

第 II 章では、ベルクソンの芸術と習慣についての思想から「心の操」の方法が探られた。芸術家などの異常な魂（注意力）を念頭に、彼は「理念を実現する意志」を持ちつつ「生活への注意力」を緩ませる「緊張と弛緩」の妙を説く。そうした美しき「放心（心を放つこと）」によって、「身体的なものと霊的なものとの出会いの場」である「図式」（「空の器」）が奔放に動く時、習慣は飛躍的に進展しうる。

第三章では、これまで思弁的に——下（肉体）からと上（魂）から——追究されてきた習慣の原理が、一芸術家の実践を通して－双方から－再検証された。土方巽の舞踏において、心と体の操に関する要素は、「迷走の拠点［肉体］」として放縦な振る舞いを可能にする体性感覚と、子供等に覗ける「騙されやすい注意力［精神］」にあり、それら異常な心身の会合処が「器」と呼ばれる。その表象は、習慣の「態勢」として、詩人の「水母」や哲学者の「空の器」に重なる。

結びに代えて私たちは、現代作家の舞踏的実践を考察しながら「心体操」の行方を示した。今日のダンスのコンテンポラリー性は、現場の（今ここの・共時の）変化に応じるパフォーマーの柔軟な態勢と不可分であり、習慣の原理が闊達に動いている結果の性質だと推察される。そのような態勢を育む術は、舞台の至芸に要る「ファインアート」から日常の福祉に副う「生存のアルス」まで活かされうる。私たちはこの視角から「心体操」の未来を観望した。

（神戸大学人文学研究科研究員：とみただいすけ）